

「身近なものの美学」と「世界作り」
——斎藤百合子の「日常美学」の新たな展開——
“Aesthetics of the Familiar” and “World-Making”:
the New Development of “Everyday Aesthetics” by Yuriko Saito

外山 悠
Haruka TOYAMA

要旨

本論文は、斎藤百合子の「日常美学」における新たな展開を、「世界作り」という語に着目することによって明らかにするものである。斎藤は2007年に『日常美学』を著し、2017年に『身近なものの美学——日常生活と世界作り——』を著した。斎藤は、日常生活の中での「美的な」経験によって私たち一人一人が「世界作り」に関わるという、独自の「日常美学」を展開させている。『日常美学』では、私たちは美的なものを知覚して「道徳的美的判断」をすることで「世界作り」に関わるとされている。『身近なものの美学』では、私たちは身体的実践を通して道徳的美徳を示したり「否定的な」質を持つものを改善するために行動したりすることで「世界作り」に関わるとされている。斎藤による「日常美学」を通じた「世界作り」は、対象物を知覚しそれに対して判断を下すだけではなく主体的に行動する私たちについて議論することで新たな展開を示している。

はじめに

今日の「日常美学」研究を代表する人物の一人として知られる斎藤百合子は、2007年に『日常美学』¹、2017年に『身近なものの美学——日常生活と世界作り——』²（以下『身近なものの美学』とする）を著した。

『身近なものの美学』第7章「世界作り」における「日常美学」の力³では、「日常美学」を通じたさまざまな「世界作り」が示されている。この「世界作り」という語は、『日常美学』では第5章「人工物の「道徳的美的判断」」⁴の中のただ一箇所で用いられるのみであった。本論文は、『日常美学』と『身近なものの美学』で示されている「日常美学」による「世界作り」とは、それぞれどのようなものであるのかを考察し、両者を比較することに

¹ Yuriko Saito, *Everyday Aesthetics*, Oxford University Press, England, 2007. (以下 EA と表記)

² Yuriko Saito, *Aesthetics of the Familiar: Everyday Life and World-Making*, Oxford University Press, England, 2017. (以下 AF と表記)

³ “The Power of Everyday Aesthetics in World-Making” (AF, 196-226)

⁴ “Moral-Aesthetic Judgments of Artifacts” (EA, 205-224)

よって、齋藤の「日常美学」の新たな展開を明らかにするものである。

I では、『日常美学』における「世界作り」の内容を明らかにする。ここでは、「世界作り」は、私たちが人工物に対して下す「道徳的美的判断」に関連するものとされている。II では、『身近なものの美学』における「世界作り」の内容を明らかにする。それは主としてアーノルド・バーリアント (Arnold Berleant, 1932 -) の「社会美学 social aesthetics」⁵と「否定の美学 negative aesthetics」の影響を受けているものであるが、齋藤はバーリアントの議論から「世界作り」へと繋がる独特の「日常美学」を展開している。

I. 『日常美学』における「世界作り」

『日常美学』では、「世界作り」の語は、齋藤独自の語である「道徳的美的判断」との関連において言及されている (EA, 208)。本章では、第1節で「道徳的美的判断」の内容を確認し、第2節で「道徳的美的判断」による「世界作り」はどのようなものとされているのかを明らかにする。

I-1. 『日常美学』の対象と「道徳的美的判断」

齋藤の「日常美学」とは、主として何を対象とするものであるのか。齋藤は『日常美学』序文において、自らの「日常性の美学」の対象の中に「美的なもの」の領域の中に、諸々の対象や現象やあるいは活動の感覚的諸性質やデザインの諸性質に対して私たちが起こすいかなる反応をも含める (EA, 9) としている。つまり齋藤の「日常美学」とは、広く諸々の事象が持つ感性的、デザインの諸性質に対して起こる私たちの反応に着目し、それらを「美的なもの」として論じるものであると考えられる。では、「道徳的美的判断」の対象となる「美的なもの」とは何か。それは人工物の外見やデザインに対する私たちの日常的な反応である。例えば「簡単に読むことができる整理された報告書や、商品が配置されたきれいな並べ方や、空港の分かりやすく読みやすい記号表示や、人間工学に基づいて設計され快適に使用することのできる用具」 (EA, 211) といったものへの反応である。またこれらの反応が「私たちの視覚、触覚、また身体的な諸感覚の直接的な経験から起こる」 (EA, 212) ということから、齋藤はこれらの人工物に対する反応を美的経験と捉えている。そして最も注目すべきことであるが、齋藤によれば、「人工物の感覚的な外見やデザイン」への「反応」とは、「美的なもの」にとどまらない。すなわち、齋藤は、私たちはそれら人工物に美的な諸性質のみを帰するのではなく、道徳的な諸性質をも帰すると指摘している。その道徳的諸性質

⁵ 『社会美学への招待』(宮原浩二郎・藤阪新吾、ミネルヴァ書房、2012) では、「社会美学 (social aesthetics) は、私たちが日々行っている「社会を味わう」活動を自覚化し、新たな知的活動として立ち上げる試みである。社会美学は、感性を通じた社会探究を目指している」とされている (宮原・藤阪、4-6)。またジンメル (Georg Simmel, 1858 - 1918) による社会学が、このような感性的な社会認識の代表例とされている。ジンメルは「「社交」を人びとが社会形成そのものの喜びを味わい合う場とみなし、そこに「社会的芸術」を見出している」 (宮原・藤阪、8)。

質とは「尊敬すべき」「気が回る」「敏感な」「思慮深い」「謙虚な」、あるいはこれらとは正反対の諸性質」といったものである (EA, 206)。斎藤によれば、私たちは日常的にこれらの語を用いて人工物の外見を批評しているからである。斎藤は、このように人工物の持つ美的な外見やデザインに道徳的諸性質を帰することによって人工物に対して道徳的な判断を行うことを「道徳的美的判断」と呼んでいる。

しかし道徳的な判断とは、通常は人による行為に対してなされるものであると考えられる。人工物の外見に対する道徳的な判断とは、どのようになされ得るのだろうか。斎藤は、人工物の外見について下される諸判断が、それらのデザインを行った人物についてなされるのではなくて、人工物自体についてなされているということを以下のように示している。

ほとんどの場合、私たちは対象物のデザイナーあるいは制作者が誰であるのかわからない。ましてやデザインをしたときのデザイナーの心理状態や意図や他作品などについては知る由もない。(中略) デザイナーあるいは制作者が、私たちの諸需要や諸経験に敏感に応じようとしてある対象物のデザインを試みたが、技術や才能の不足のために酷く失敗をしたせいで、結果としてそれが思いやりの無い無配慮なデザインとなるということは有り得るだろう。(EA, 209)

斎藤は、たとえ制作者が「私たちの諸需要や諸経験に敏感に応じよう」という道徳的に好ましい性質を持っていたとしても、それは必ずしも完成した人工物の外見やデザインに反映されるものではないと指摘している。しかしまたその一方で、先に見たように、私たちは人工物の外見やデザインを「尊敬すべき」「気が回る」「敏感な」「思慮深い」「謙虚な」、あるいはこれらとは正反対の諸性質」を表す語を用いて評価している。このようにして、斎藤は、人工物の外見やデザインからは「美的判断」と「道徳的判断」が同時に行われることと、その判断は確かに人工物の外見やデザインに対してのみ行われているということを明らかにしている。

I-2. 「道徳的美的判断」と「世界作り」

斎藤は、人工物に対して行われる「道徳的美的判断」は、「所属」の感覚を養うものでもあると主張している。「道徳的美的判断」とは、人々を一種の共通する意識へ導こうとするものなのである。そのような性質によって、「道徳的美的判断」は「世界作り」と結びつけられるのである。

先に確認したように、「道徳的美的判断」とは、人工物のデザイナーや制作者ではなく、人工物を知覚して使用する私たちによって下される判断であった。そのような私たちによる「世界作り」は、いかにして行われるものとされているのだろうか。斎藤は、まず、「諸人工物によって提供される安心感や快適さや美的な楽しみに取り囲まれ、また、それらを楽しむことができる」ということによって、私たちは「ある所属の感覚 a sense of belonging」

(EA, 240) を引き起こされると指摘する。すなわち私たちは、そのような快適さや好ましさのある世界を保とうとするようになり、公共の場などの良い状態の維持に気を配るようになる (EA, 240)。そして斎藤は、以下のようにまとめる。

このことが意味するのは、この道徳的美的な要求は、この世界におけるデザイナーや制作者のみに向けられているものではないということである。この世界での使用者や住民としての私たちはそのような責任を免除されない。すべての人がこの進行中の文字通り「世界作り」の計画に関わることは、民主主義の社会におけるすべての市民の政治参加と同様に重要である。(EA, 241)

私たちは、人工物から好ましい「道徳的美的判断」を行うことによって、そのような楽しみのある社会に属しているという「所属」の感覚を覚え、そのような社会の維持に努めるようになる。斎藤によれば、道徳的判断と美的判断とが結びつくことによって、より私たちにとって好ましい環境が維持されるのである。ここでは、人工物に対して「道徳的美的判断」を下す使用者がそのような判断のある社会を維持しようとするという、「道徳的美的判断」の持つ双方向的な役割によって、より好ましい社会が維持されるということが、「世界作り」という語で示されているのである。この「世界作り」は、人工物の使用者一人一人による「美的道徳的判断」によってなされている。

II. 『身近なものの美学』における「世界作り」

『身近なものの美学』では、「日常美学」が、より良い「世界作り」に貢献するために何が行われるべきであるのかがより具体的に示されている。それは 1. 「美的なパラダイムシフト」、2. 「身体的実践」、3. 「否定の美学」に目を向けることの 3 つに大きく分けることができる (AF, 205-218)。本章の第 1 節、第 2 節、第 3 節では、この 3 つの「世界作り」について考察する。なお、その際には、『身近なものの美学』で挙げられている様々な実例のうち、特に私たちの一人一人の判断や行動に深く関わってくると思われるもののみを取り上げる。そして第 4 節では、それらの「世界作り」が、『日常美学』で示された「世界作り」からの新たな展開を示すものであることを明らかにする。

II-1. 美的なパラダイムシフト

斎藤は、ごく日常的でありふれた美的趣味における、自然環境に悪影響を及ぼすようなものの存在を指摘している。例えば、私たちは見た目に美しい風景を保護しようとする一方で、たとえそこに豊かな生物多様性が見られたとしても、湿地などの退屈な風景の保護には無関心である (AF, 205)。「日常美学」の力によって、すなわち、現在の私たちがそのような美的趣味を変化させることによって、それらをより良い「世界作り」に貢献し得るものとする、ここでは自然環境に悪影響を及ぼさないような趣味に変化させることはできるだ

ろうか。人々の間に深く浸透した美的価値観を変えることは非常に困難であるだろう。そこで斎藤は、美的に受け入れられ、かつ自然環境により良い影響を与える取り組みを紹介している。例えばジョアン・ナッサウアー (Joan Nassauer) は、都市の風景に生物多様性やより環境に良いものを定着させるためには、それらが文化的に受け入れられるかどうかを考慮する必要があるとしているという (AF, 207)。ナッサウアーによれば、都市の風景の中では、生物多様性を示す風景は、乱雑なもの、人による手入れが不足したものと見なされる傾向がある (AF, 207)。ナッサウアーは、境界を示すフェンスなど手入れを思わせるものを加えることによって、それらは「文化的持続可能性 *cultural sustainability*」を持ち得るとしている (AF, 208)。

II-2. 身体的実践

斎藤は「日常美学」の重要な側面として、行為者としての私たちの経験を挙げている。また斎藤は、私たちの行為が自己完結的・自己満足的なものに終わる危険を避けるために、それらの「社会的および対人的な面」を強調しなければならないとしている (AF, 210)。それにより、『日常美学』で論じられた人工物のデザインに対して下される「道徳的美的判断」のように、日常生活における身体的実践もまた道徳的美徳と関わりを持つことになる。斎藤は、社会的状況とは、私たちによる他者とのやりとりによって作り出されるものであるとしている。そして、その他者とのやりとりの中で、日常生活における身体的実践を通して、私たちは他者への尊敬や思いやりを示すことができるだろうし、また私たちは道徳的美徳を育むために身体的実践をする必要があるとしている (AF, 210)。

斎藤は、こうした身体的実践による道徳的美徳の現われについて論じる際には、バーリアントの「社会美学」が有益なものとなると述べている (AF, 211)⁶。斎藤によれば、バーリアントの美学とは、近代西洋美学に深く根差した、鑑賞者 (主体) と対象物 (客体) の明確な分離、そして1つの美的経験をもち無関心的態度をとる鑑賞者という、2つの前提を克服しようとするものである (AF, 211)。斎藤は、この「無関心的」姿勢は、美的経験や判断の必要条件とみなされ、また、そのことによって、美的な問題は、他の人間の関心事から隔離されてきたとしている。バーリアントもまた、このような美的言説が、美的経験の身体的、社会的側面を過度に排除してきたと考え、これら諸側面に目を向けている。斎藤は、バーリアントによる以下の文章を引用している。

対人関係の相互作用や社会的状況には、様々な感覚的なもの、よって美的な側面が関与し、それら[美的な側面]は、容認、唯一性の尊重、相互性、またはこれらの欠如などと

⁶ 斎藤は Yuriko Saito, “The Ethical Dimensions of Aesthetic Engagement”, (*European Society of Pediatric Endoscopic Surgeons*, Vol 6, No 2, Slovakia, 2018, pp. 19-29)においても、自らの「日常美学」は、「社会美学」などバーリアントの先駆的な研究を基とするものであると述べている。

いったそれら[対人関係の相互作用や社会的状況]の性格を決定する。これらの特徴は私たちの美的な関与の根底にあるものであるが、人間間の倫理的関係をも特徴付けている。したがって社会美学は、「美的なもの」と社会的なものの本質的な関連性」と「社会美学の中心にある倫理的価値」を強調する⁷。

バリエーションの「社会美学」は、社会、特に私たちの人間関係の中での感覚的な経験を美的なものとし、またそれら美的なものが、人間関係の持つ倫理的特徴をも決定づけるものである。斎藤の言う身体的実践もまた、それらの「社会的及び対人的な面」と、それに伴う道徳的美徳との関連において論じられるものであり、ここでの斎藤とバリエーションの立場は非常に類似しているように思える。

斎藤は、このような身体的実践の具体例の一つとして、日本の「躰」を示す。ここで斎藤は、日本語の「躰」という語を、身体を意味する字と、美を意味する字から成り、「社会的規範やマナーの育成」を意味するものであると説明している (AF, 211)。そして、躰においては、「ドアを開閉する、コップを持つ、名刺を受け渡しする、贈り物を開ける」などの日常的な行為をどのように行うかが示されるとしている (AF, 211)。私たちは、これらの行為を慎重に行い、十分に尊重し、念入りに練習しなければならない。斎藤は、私たちが不注意に行動し、私たちが示すものの外見や私たちが立てる音が他人にどのような影響を与えるのかに無関心であれば、ある行為の目的（ドアを開ける、コップを持ち飲み物を飲むなど）が達成されたとしても、そのときの私たちの行為は上品さを欠くだけでなく無礼な行為でもあるだろうと指摘する (AF, 211)。ここで斎藤は、ごく日常的な身体的実践がマナーや規範上適切な仕方で行われるかどうかは、上品であるかそうでないかという問題に関わるだけではなく、他人への思いやりの現われともなると指摘しているのである。このようにして、身体的実践によって他人への考慮が美的に示され、また私たちはそれを感性的に知覚しているということが示されている。

II-3. 「否定の美学」

斎藤は、「世界作り」のプロジェクトの重要な側面の1つは、日常生活の中の、美的に否定的な質を持った面を見つけることであるとしている。それは、日常生活の中で見いだされる、「恐ろしい、攻撃的な、悪臭のある、荒々しい、退屈な」(AF, 214) といった質である。斎藤はこれらの質を、それらが私たちの感性を通しての反応から生じる限り、美的質に含めることができるとしている (AF, 214)。

「否定の美学」の例として、斎藤はゴミ置場を見るという経験を挙げている。私たちは、ゴミ置場に対して距離を置いた無関心的な態度を取ることによって、それを単なる色とテクスチャの興味深い組み合わせとして見ることができ、それを美的に肯定的なものとして

⁷ Arnold Berleant, *Sensibility and Sense: The Aesthetic Transformation of the Human World*, Imprint Academic, Exeter, 2010, pp. 7 and 95.

見る美的経験をすることができるだろう (AF, 214)。しかし、斎藤によれば、「日常美学」による「世界作り」の文脈においては、見た目が悪い、悪臭がするといった、ゴミ置場の持つ美的に否定的な性質が、そのまま否定的なものとして経験されるということが重要である (AF, 214)。それによって、私たちはそれを取り除いたりその質を弱めたりすることによって状況を改善する方法を考え、その結果より良い「世界作り」に向けて行動することができるようになるからである。

「否定の美学」に目を向けることの重要性を指摘する美学者は他にも見られる。斎藤はその中でも、バリエーションとカチャ・マンドキ (Katya Mandoki) の名を挙げている (AF, 214)。まず、バリエーションの「否定の美学」⁸は、感覚的経験が「不快を感じたり、傷つけられたりして、害やダメージのある結末を迎える」状況や環境に注目するものである (AF, 215)。バリエーションは2種の「否定の美学」を示す。1つは、まったく単調で肯定的な美的価値を持たないものに由来する。その例としては、「小道の住宅、巨大小売店、陳腐な会話」、「匿名性を持つ郊外の住宅地」(AF, 215) などがある。もう1つは、「実際的な否定的美的価値の存在」(AF, 215) である。バリエーションによれば、それらの存在は自然環境や健康だけでなく、私たちの感性にもダメージを与えている。例としては、「道路交通の轟音、公衆の場での大きな話し声、携帯電話の会話、大きく派手な色の広告、性的な広告」(AF, 215) などがある。バリエーションは、これら否定的な美的質を持つものの存在による「美的な剥奪 aesthetic deprivation」によって私たちの感性が鈍らせられることを懸念し、それを避けるために、それらの存在に鋭く気づくことが重要であるとしている (AF, 215)。

またマンドキは、現在の西洋美学には、「素晴らしく、価値があり、美しく、良いもののみを扱う傾向」が未だ根強くあると考え、「美的な中毒」への注意を喚起している (AF, 215)。マンドキは、私たちの日常生活では、嫌なこと、卑劣なこと、粗悪なこと、無意味なこと、辛辣なこと、醜い、醜悪なものなどの否定的な美的質に直面することが多くあるため、それらへ目を向けるべきであると主張する。それは、「美的理論は生活の質を守るために社会的現実に関わらなければならない」(AF, 216) からである。

斎藤は、「日常美学」における「否定の美学」について、今日の世界に美的に否定的なものが存在していることを認めることが重要であり、また、私たちの身体的反応や身体的活動が、その発見や改善にあたって大きな役割を果たすだろうとまとめている (AF, 216)。

II-4. 斎藤の美学の新たな展開としての「世界作り」

斎藤は、「美的なパラダイムシフト」、「身体的実践」、「否定の美学」を通じたより良い「世界作り」について、「私たちは良き人生や社会を構成するものについてコンセンサスを持っていない」(AF, 216) という反論を想定している。そのような反論について、斎藤は、良き

⁸ バリエーションの「否定の美学」について、ここでの議論は *Sensibility and Sense: The Aesthetic Transformation of the Human World*, pp. 155-174 (Chapter 9 “The Negative Aesthetics of Everyday Life”)を参照している。

人生や社会についての考えの表面的な統合は文化や歴史やその他の文脈に依存しているとしつつも、「健康や、持続可能な未来、相互尊重に基づく人道的な市民社会など、人類の繁栄に共通して受け入れることができる基本的な事実と価値があると思われる」(AF, 216)と主張している。

『日常美学』では、「道徳的美的判断」を通じた「世界作り」が論じられていた。このとき私たちは、人工物の外見やデザインについて判断を下す、いわば目撃者としての立場にある。これに対して、『身近なものの美学』では、「より良い世界作り」のために、身体的実践を行ったり、否定的な美的質を持つものに目を向け改善に向けて行動したりする行為者としての私たちが論じられているように思われる。なお斎藤の、「身体的実践」を通じて好ましい社会的美徳のある世界を作るという発想は、バリエーションの「社会美学」を基盤とするものであるように見える。そして斎藤の「否定の美学」は、バリエーションやマンドキの「否定の美学」と類似しているように見える。しかしバリエーションの「社会美学」、「否定の美学」、あるいはマンドキの「否定の美学」の文脈においても、やはり私たちは、肯定的な美的質を持つものを感性的に味わう、あるいは否定的な美的質を持つものを拒否するという目撃者の立場にとどまっているように思える。

おわりに

本論のⅠでは、『日常美学』における「世界作り」の文脈を明らかにした。そこでの「世界作り」とは、人工物の外見やデザインに反応し、「道徳的美的判断」を行うという私たちの受け身的な行動によってなされるものであった。Ⅱでは、『身近なものの美学』における「世界作り」の文脈を明らかにした。そこで私たちは、身体的実践を行ったり否定的な質に目を向け状況の改善のために行動したりする行為者となっている。斎藤の「日常美学」による「世界作り」は、目撃者の立場として私たちだけでなく行為者の私たちの立場をも論じることによって新たな展開を示している。